

# 1

## もう一つの地図作り

講座などで、子ども時代の原風景がどんなものだったかを出し合った事がある。もちろん一人ひとり違うし、世代によっても違うけれど、共通していたのは、連れて行ってもらった観光地や、遊園地ではなく「ごくごく身近な町の風景であった」。

例えば、米屋のお兄ちゃんがブラッシーを運んでるスクーター（時々乗つけてくれた）や、秘密の近道、近所の肉屋のコロッケの匂い、ひたすら掘った赤土であったり、子犬を飼った洞窟や、石蹴りをした道路のごっこつした感触であり、六時過ぎると手が伸びてくるという伝説がある杉の木なのである。また、夕焼け空の色や、夕暮れの匂いや、風に運ばれてくる様々なおかずの匂い。暑いときは、風が通る木陰で涼み、寒いときは、風が通らない塀の下に行った。現実のまちとのかかわりの中で、子どもたちは、まるで、もう一つの地図を持って動いていた。まちとかがわり、遊びこむことで、地図を作り上げていたと言ったほうがいいかもしれない。その時間がどんなにかけがえのない時間だったのか今改めて思う。

以前、商店街で忍者修行を行ったとき「匂い集めの術」をしたことがある。古本屋さんの中から匂ってくる匂いが、甘い匂いだった、そのとき子どもが、「あっプリンだー」と叫んだ、仲間は、確かにプリンの一音に納得！ それからというものとんかつの匂いがする喫茶店の看板や、ラーメンの匂いがする洋服屋さんなど見つけることができた。また、雨の日の修行で、次の道場まで雨にぬれずに行くこうと、駐車場・玄関・木の下・塀の間とつたわって、見事にぬれずに行ったことがある。それは、あ



そびの中で、ものすごい現実と対面し、気づき、直接行動をして体験（実感）をする。そして、それが知恵となり、もう一つの地図に書き込まれていくプロセスそのものであった。

今、子どもたちは、どんな地図帳を持っているだろうか？「昔はよかった」などと言うつもりはない。しかし、この地図を書き込んでいた時間が、一体子どもたちにとってどんな意味があったのか！

その事を考えて行きたいのだ。僕の中にもある、原風景の中に刻まれたもう一つの地図。これが一体何を耕し、磨いていたのか、その事に迫ってみたい。